

第八回

地球は回っているのか

本堂での誕生会で「恩」といふ話を語っております。「恩」といふむかしいことですが、「自分のために誰かが何かをしてくれたねんじょ」とい言えます。そこで、人の恩と天地の恩があることいふので、こんなふうに言いました。

「この地面、真っ直ぐなまっただけと曲がっている、丸いんだって。」そう言っていて、壊れた地球儀の地球部分だけを取り出す。すると、すかさず音があがる。「地球だ」「地球は丸いんだよ」「知っているな」

「えっ、丸いの？ じゃあ、どうして裏にいる人は落ちないの？ それにプッカリ浮いてるんだって。なんで落ちないの？」と私。

「地球は回ってるんだよ」「引力があるんだよ」。こんな知識をすらすらと語る子どもがいる。私はそれに危惧を覚える。そんな簡単に言っていることだと思わないからです。それを言っている子どもたちに実感があるでしょうか。なければ、大人に吹き込まれた知識の断片に過ぎません。そんな知識のきれはしのせいで、地球が浮いていることや「対蹠」という事象にたいして驚く感性が、鈍る。天動説は解決済みの古い迷信ではありません。生活実感は天動説的です。地球が動いていることを知識としてではなく、自分で確認し納得するには、かなりの難問を解かなければならぬはずです。

私たちはよく、知識よりも経験が大事だなどといいますが、経験で確

かめもしない知識を相当といど信じています。他人によって頭に貼り付けられた「知識」は使えません。自分で納得した「経験」によって身に付いた「知恵」は、生きる力になります。

ほとんどの知識は断片ではない、上智大学の奈須先生もいわねるように「知識は本の中にあるという幻想」から脱け出しましょう。そうしたら「教科書」を「暗記」するところが、そして少しも早く「知識」をためるということが、本堂の知識でも学力でもないことを認められるはず。

学ぶとか知るとかというのは、本来ドキドキする楽しい営みです(それなのに、どっぴり小学生はあたりまえのように「勉強」がきらいなのだ)。そこは、自弁性や創造性がうごめき、驚きに満ちているからです。この楽しさは人間としてあることの喜びとインテリジェンスは違います。

この喜びを奪うのが、感性にもどつかない無味乾燥な知識をあらかじめ貯め込むことだとしたら、あなたは自分の子どもに「早期教育」をほどこしますか。

本堂では、地球が落ちないのは、阿弥陀様かだっぴりしているからだよ、と答えます。そんなの非科学的な迷信だら、と言いたくなる大人とは、時間をかけて話したいと思えます(今までも私は色んな年齢や職業の人とそういう対話や議論を続けてきました)。阿弥陀様というのは、限のない光・限のない命のことなのです。そう言い換えてみれば、安易な空想ではないとわかるでしょう。こそわかに「ニュートンのかもしれません」が。

